

# 死をどう位置づけるのか

## 葬儀祭壇の変化に関する一考察

How to Value Death: Consideration on Changes of the Funeral Altar

山田慎也

- ① 葬儀の儀礼空間
- ② 祭壇の成立
- ③ 彫刻祭壇と仏浄土のイメージ
- ④ 生花祭壇と生前の足跡
- ⑤ 死の捉え方

### 【論文要旨】

本稿は葬儀祭壇の形態から現代の死の位置づけ方についての考察を試みるものである。かつて葬儀は自宅で通夜、出棺の儀礼を行ったあと、葬列を組んで寺院や墓地などに向かい、そこで改めて儀礼を行い埋葬や火葬となった。それは喪家の儀礼、葬列、寺院・墓地での儀礼と空間を移動して、段階的に儀礼を行っていたのである。こうした儀礼で使用される葬具は、喪家や寺院・墓地などの儀礼よりも、葬列に対応するための形態であった。

東京などの都市部を中心に大正期以降葬列が廃されるようになると、自宅における告別式が普及し、祭壇が使用されるようになった。当時は白布を掛けた祭壇が使用され、昭和30年代まで白布、金襴などの布掛け祭壇が使用されていた。布掛け祭壇は五具足や灯籠、位牌堂、ケソクなど個々の道具の並べただけであり、祭壇全体として何らかのモチーフを喚起するものではなかった。

だが祭壇が彫刻幕板祭壇になると、祭壇の段自体に意匠を込めるようになった。さらに最上段の棺かくしが宮殿化することにより、祭壇は総体として仏浄土を想起するデザインとなり、柩を祭壇前に安置することで他界にたどり着いた死者を喚起するような儀礼空間を演出するようになる。

一方、おもに大型葬では生花祭壇が多用され、なかでも会社や非営利団体などの団体葬は団体のシンボルや団体への死者の功績を祭壇中に表象することが多い。個人葬の場合、故人の功績だけでなく趣味や嗜好までも表象するモチーフをとるものもみられる。従来、葬儀祭壇はモチーフを持つものではなかったが、近年の生花祭壇のように積極的に意味を見いだそうとしているものもある。それは死にゆく人を生前とは異なる別個の存在に転換して扱うよりも、生前の足跡や個性を表象する傾向が強く見られる。つまり葬儀において、死を生前の記憶に位置づけるようになったのである。

キーワード：葬儀、死、葬列、葬具、祭壇